寄 書
LETTER TO THE EDITOR

IAF 第 23 回総会*

The 23rd Congress of IAF: Vienna, October 8~15, 1972

長 友 信 人**

Makoto NAGATOMO

1. IAF とは

IAF の第 23 回総会は昨年 10 月オーストリアのウィーンで開かれたが、私は機会に恵まれて、この中のシンポジウムの一つにおける論文発表者として、また総会本会議の日本代表として、これに参加することができたので、そのふんい気をお伝えしたい。本学会は IAF を脱退しており、会員の関心もうすいかと思われるが、これは、ほとんどすべての宇宙関係分野を網羅する唯一の国際的連合組織として重要なものである。ここで IAF への理解を深めていただければ幸いである。

IAF は International Astronautical Federation の略で、これはわが国では“国際宇宙航行連盟”と訳されているようである。連盟の規約を読むと、その主たる目的として、宇宙航行学 (astronautics) の平和利用の推進および知識の普及、またその広報活動、研究活動の国際的連携、等がうたわれている。しかしこれだけではどうしても漠然として良く分からないという人も多いだろう。組織的に見ると、この連盟には宇宙関係の学会・協会その他の団体が加入することができ、各国から一団体が総会において投票権を持つ代表メンバー (vote member) となる。わが国では現在、日本ロケット協会と日本宇宙旅行協会がこれに加入し、前者が代表メンバーとなっている。

IAF の日常の活動は、その組織している IAA (International Academy of Astronautics) の中の各種委員会が、個々に、情報交換、研究者の組織化などを行っているが、その活動形態は一見グループ的というか、独立した動きに重点をおいているので、この中に入っていないと良く分からないようである。これも“宇宙”が一つの研究分野というよりむしろ、種々の活動の“場”を意味していると考えればやむを得ないことであり、IAF そのものが大きなゆるい連合となっているのはむしろ好ましいといえるだろう。

2. 会議の町ウィーン

この一見、漠然とした組織がまとまりを見せるのが年一回の“総会” (Congress of IAF あるいは写真のポスターにあるように International Astronautical Congress) である。これは以下にも述べるように大層にぎやかなもので、要するにお祭りさわぎだ、という人もいる。しかし、お祭りには沢山人が集まってくるから、“学問とは真理をめぐる人間関係”という見方からすれば、これは大変有益なものであろう。

総会は加盟国のまわりもちで毎年開かれるが、1972 年は前年のベルギー同様ヨーロッパ内のオーストリアのウィーンで 10 月 8 日~15 日の一週間開催された。

ウィーンは歴史的に有名な会議が沢山開かれており、町は度重なる国際会議になれ切っているはずなのに、いかにも町をあげての歓迎といったあたたかさが

第 1 図 第 23 回 IAF 総会のポスター

* 昭和 48 年 4 月 16 日原稿受理

** 東京大学宇宙航空研究所

ある。しかし一週間もいるとこれもやはり観光地としての粧いの一つであったか、と感じるようになってくる。さもありなん、オーストリアの貿易収入の第一位は観光収入だそうである。会議は大切なお客様なのだ。

ウィーンは人も知る芸術の都。年配の方ならワルツでダンスという楽しいふんい気を思い出されることでしょうが、戦後派にとっては“第三の男”の町としても有名である。こじんまりとしたホテルでは日本人は珍しいらしく、どこかで見たような顔をした番頭は私の顔とパスポートを見比べていたが、やがてうんうんうなずいて部屋の鍵をくれた。なれない飛行機でいきなり地球の反対側に連れてこられたものだから頭がピンとこず、“今日は9日だからもう開会式は終わっているな”などと考えていたら、さっきの番頭のことを思い出した。どこかで見たような顔は“第三の男”の映画の中で見かけたものだった。“そうか、ここはウィーンなのだ”，私はとびおきて仕度をする、会場のホッフブルグ宮殿に行く市内電車にとび乗った。

3. 総会の内容

複雑な IAF 総会の内容を便宜的に3つに大別しておこう。

第1はセッションに分けられた発表講演で、これらは IAF の事務局 (パリ) と開催国の主催団体 (今回はオーストリア宇宙航行協会) が窓口となってペーパーが一般から募集されている。このさい、採否の審査がないも同然だそうであるが、私はこれはいいことだと思ふ。

第2は前述の IAA 内の各種委員会の開催するシンポジウム等で、総会プログラム上は第1のセッションものといっしょに扱われ、会場も同じ所を使うのがふつうであるが、組織上の性格が異なっている。つまりここで発表されたり討論されたりするペーパーは各委員会が用意し、多くの場合委員長を中心として予定したもの (invited paper) である。

第3は IAF の総会本会議 (General Assembly) である。これには参加国代表メンバーが出席して、IAF の活動方針の決定、予算承認、役員の選出などを行なう。これに関連して委員会が開かれることもあるが、いずれにしてもこれらはどちらかといえば政治的で、前二者の学術発表とは趣きを異にするものである。またこれらのスケジュールはプログラムには明記されていないが期間中2日間位が集まりに費やされる。もちろんしかるべき国々の代表は一週間いっぱいいろいろ忙しく、真面目にやろうと思えば論文発表者がこれを兼ねるのは無理がある。

以上のようなことが分かったのは会場に行ってからである。上のような事情からすると表題で IAF 総会といったのは“大会”という方が適切かも知れない。ただしここでは慣習に従っておこう。以下で簡単にこの内容を紹介するが、何しろ日本からの出席者は、私の他に三菱電機の土屋氏だけ。NASA の籍で来ている草薙君を入れても三人というありさまで、全員でがんばっても全会場に顔を出すこともできなかったが、アブストラクトを見ながら、また会場のふんい気を思い出しつつ上の分類別に話題をひろってみよう。

3.1 一般セッション セッションはスペシャリスト・セッション群とテーマ・セッション群があるが、IAF の発表講演が他の学会に比べて目立つのはテーマが広く、目新しい点であろう。“ゼロ重量状態での材料加工”セッションでは、スカイラプとスペース・ステーションのために行なわれた研究と思われるものが多い。“科学宇宙船の設計”セッションではいくつかの惑星探査プローブの計画や、米ソの実績が紹介された。ESRO の金星プローブと西ドイツの HELIOS 計画が目立つ。ロケット飛しょう体は、“宇宙輸送の問題”というセッションに入っているが、これは“地上から軌道へ”および“軌道から軌道へ”という2つのセッションに分かれている。ここでは当然、話題のスペース・シャトルとスペース・タグに関する発表が多いと思っていたが、タグの方はともかく、地球からの打ち上げに使うシャトルの方は、後で述べる“打ち上げコスト低減”シンポジウムに出し物をとられた感じで、スカウト・ロケットの性能向上とか、地上チェック・アウト装置のモジュール化といったありきたりの内容が多かった。“宇宙生物学”は“生命科学”“生命維持”“宇宙医学”の3セッションに分かれていた。生命科学はオーソドックスな内容で門外漢にはさっぱり理解できないが、あとの2つは将来の大型宇宙ステーションに備えた大規模な宇宙農場やスペース・コロニーの話などプログラムは楽しそうな話でいっぱいだった。しかしあいにく一つも聞くチャンスがなく、この方面の論文の多いソ連の欠席が多かったことも確認できず残念だった。“資源衛星”や“教育用衛星”はテーマ・セッションとして3つ設けられていたが、ERTS (アメリカの資源衛星) が活やく中のことであり、遠隔検知技術や公害対策などはやりのテーマを取り扱っているせいもあってにぎわっていた。

この範ちゅうに含めていいかよく分からないが、“学生会議” (International Student Conference) といういかにも IAF の趣旨にそった、興味のある催しがある。これはオーガナイザー、発表者とも学生であって、提出された論文をシニアである各国専門家数名か

ら成るレヴュー委員会の査読を受けることになっている。今回は第2回であるが3セッション相当をこれにあてていた。プログラムで見るとヨーロッパが圧倒的に多く、さすがのアメリカも、高い足代を出せる学生は少ないらしい。取り上げているテーマは基礎的なものが多いが、若いうちにこういうことを卒業して、国際会議にも慣れてしまえる連中が羨しい。

以上、私が IAF らしいと思ったセッションを主に取り上げたが、もちろん“宇宙航行力学”“材料・構造”“推進”“流体力学”等の専門別セッションにもぎわっている。しかし、これらの内容は ISTS-Tokyo に比べて差がないように思える。むしろプロシーディングスが完全に残るという点でいえば、むしろ ISTS の方がすぐれているといえるかも知れない。ともかく論文題目などから察するに、これらの専門研究によって支えられ、逆にその研究を促してきた宇宙プロジェクトが、アポロ計画で一段落した結果、研究そのものが整理の段階を経つつあるという傾向が続いているようだ。

これに対して“青少年ロケット実験の安全性”セッションと“宇宙活動の環境破壊におよぼす効果について”の討論会などで取り上げている問題は“宇宙”についてなすべきことが、学問研究の面だけにとどまらないことを示しているようである。この傾向は、実は宇宙科学・工学そのものの中にもあらわれてきつつあり、新しい研究は宇宙を一つの環境と考えて、ここにすべての人間活動が進出する事態に備えつつある、といっていると思う。次のシンポジウムやコロキウムではこれが顕著にあらわれている。

3.2 シンポジウム・コロキウム シンポジウムはいくつかの委員会が開催するので、すべてを知るわけにはいかなかったが、私が関係のあった“宇宙救急シンポジウム”についてやや詳しく内容をのべて、他を推しはかることにしよう。このシンポジウムはすでに第5回で、毎回プロシーディングスを残している。委員会は“宇宙救急に関する研究委員会”で、委員長は発足以来アメリカはテキサスのキャンベル博士 (Paul A. CAMPBELL) であった。シンポジウムは議長と同博士を中心にまとまったふんい気をもっており、参加者は顔見知りの人が多いなごやかさと、委員会の平常の活動のしめくくりをしなければならないという意気込みのようなものがある。新顔は私一人らしかったが、キャンベル博士が筆者の上司玉木教授と知己の間柄であること、また私のペーパーをあらかじめ同博士の旧知であり、この委員会のメンバーである慈恵医大の佐伯教授が売り込んで下さったので、スムーズに仲間入りさせてもらった。むしろ“宇宙救急”という風変わり

なテーマで同好の士を得たために、国内の学会などよりはむしろくつろいだ感じであった。シンポジウムの内容は、“宇宙救急”そのものの説明になるので、これはまたの機会に本誌の編集委員に取り上げていただくことを期待して、省略したい。

シンポジウムとは別に“宇宙救急に関する研究委員会”が開かれ、シンポジウム発表者も招待されてふんい気を味わった。他のセッション同様、シンポジウムではソ連が欠席して発表が取り消されたが、次回 IAF 総回がソ連で開催されることもあって、宇宙生物学のアダモヴィッチ博士が出席して、来年の方針を打ち合わせた。ここで、委員長から、元来医学関係者の多いこの委員会の活動を将来工学関係者も含めてより広いものとしたいので、シンポジウムの名称を“宇宙救急と安全性”としたいと提案され了承された。これについては、筆者らの発表“人工飛行物体との衝突に対するスペース・ステーションの安全性”の内容を考え合わせた上での提案と察せられて、大変うれしかった。またこの席で、長年このむつかしい委員会をまとめてこられたキャンベル委員長が同じくアメリカのボルジャー副委員長と交代したい旨申出があって皆で労をねぎらい了承した。

この他のシンポジウム等について一言ずつ。“宇宙航行コスト低減”シンポジウムは、スペース・シャトルとタグの話が中心であるが、アメリカと西ドイツが開催しているようなもので、平素の両国の協力ぶりを示すように発表は二国が独占していた。“宇宙航行の歴史”シンポジウムは、どんな人が聞くのかと思っただけだったが、意外に沢山の聴衆がいた。これも、もう6回目、そろそろ日本のロケットの昔話を、長老のどなたか行って話してきてもいいのではないかと思っただけだ。ぜひ聞きたくてはたせなかったのは、一つは“国際月面実験室”(Lunar International Laboratory 略して LIL) で、プログラムによると、アメリカ、ソ連、ブルガリア、チェコ、フランスなどの発表があったらしい。このあたりでのホラの吹き合いは楽しかろうと残念がる。もう一つは“宇宙での原子力動力と推進”で、これは当地に本部を持つ、国連の国際原子力機関 (IAEA) との共催で、場所も IAEA 本部に移して開かれたため、ペーパーの一部を入手しただけである。内容的には、計画がスロー・ダウンして新味のないアメリカの現状報告とどうでもいいようなことの書いてあるソ連の出し物は、つまらなく、ELDO の原子力ロケットの計画と西ドイツで開発中の(残念ながらその直後に中止になった)宇宙用原子炉の発表が目立っていた。とくに ELDO のものはわれわれのグループのものと比べて“1日の長”位しかない代物で、

第2図 第23回 IAF 総会のゼネラル・アセンブリ風景

後でお互いになぐさめはげまし合った。

コロキウムは宇宙空間 (outer space) の法律に関するもので、これは何と4セッション分もあって、会場は大にぎわいだったが、後日、アヴィエイション・ウィーク誌を見ると実際面白かったらしい。ロケットと人工衛星が主体のわれわれから見ると、“やれやれ宇宙もこんなになって!”という気持になる。そうして悲しむ人もいるだろうが、私はどちらかといえば喜ぶ方である。このほかには、CETI (地球外知的生物との通信) に関する会合が IAF においてはじめて開かれた。

3.3 総会 (General Assembly, Plenary Session)

3日目になるまで私は何故これが IAF の Congress なのかよく分からなかった。何故なら、プログラムには、総会のことは出ていないし、その筋の動きを伝えてくれる知人はいないし、ただ、東京を発つときに“もし君より年長の日本人がいなかったら、日本の Chief Delegate たるべし”という謎めいた伝言があったただけだからである。しかし、当日、もう一人の (しかも私より若い) 土屋氏がとんできて、国名の札が並んだ会場が作られているが、日本の席にだれか坐らなければいけないのではないかといわれたとき、当然のようにその席についたのである。そのうち、これがただ坐っていれば良いというものではないことがだんだん分かってくるのだが、そのときはすでにおそしである。

議長はジュスチャーたっぷり、表情豊かな IAF 会長のジャモッティ (JAUMOTTE) 教授で、あらかじめ配布された議事次第に従って、大声で議事を進めていくさまは、まことに見事で、英語でしゃべっていたかと思うと、フランス語になっていた (英、仏、独、露、西、5カ国語が公用語) ただでさえ良くわからない内容はすっかり混乱して、しばし茫然としていた。同時通訳のイヤホンをきくと、どうやら英語で一回いったことをフランス語でいいなおしているらしい。内

容も前回議事録の確認をしているらしいことがわかってきた。

前回議事録の中に、わが“日本航空宇宙学会”が財政上の理由で脱会するという記録があった。そのほかに、会費滞納で除名されたイタリアの団体のことが出ていたが、これに比べると随分いさぎよいというか積極的な行動と受け取られそうである。IAF でなりをひそめている日本としては目立った動きだが、残念であった。

そのうち次期役員選出のための指名委員会が決められて日本がこれに入った。

さらに次回総会の議題にうつり、ソ連代表から、アゼルバイジャン共和国の首都バクーで10月第1週に開催したいと提案された。ソ連開催の噂は前から聞いていたのでモスクワだとばかり思っていたが、意外だった。期日については、アメリカがスカイラブの3回目の飛行があるとかでずらしてくれ、といい二三のやりとりがあった後、第2週つまり8日から15日までに移され決定された。

このあと、総会の催し物、刊行物などについて議題が討論採決された後、第1日目は散会した。

やれやれと思ったとたん、今、決まっただけの指名委員が集まって、“今からすぐ日程を打ち合わせるから”といって、連行されてしまった。どういうことかよくわからないが、5か国5人の委員会じゃ逃げ出すわけにもいかない。翌日の午前中に委員会を開いたが、委員長のイギリス (BIS) のカーターさんが徹底的にやる気をおこしているの、総会にぼんやり坐っているのとはわけが違って来た。まず、わかったふりをすることができない。仕方がないので時々話をやめてもらって、となりに坐っている東ドイツのホルタックス氏にリフレイズしてもらおう。一方、スペインのマチュサンチョ氏はこの委員会には毎回でているという強者であるが、この人も時々わからなくなってしまうらしくて、となりのポーランドのヴォルチェック氏にスペイン語で通訳してもらっている。話の進行とともに、この東西2か国2組の組み合わせが定着してきた。だれかが見ていたら全くこっけいな光景だったろうが、この委員会は人事を扱う絶対秘密の集まりであるから、部屋にはだれも入ることはできない。おかげで、内心“へえ、そんなものか?”とびっくりしてしまうような話をいくつか聞かされもした。役員候補の人選は、委員長のリストを基本にして、順調に進んでいったが、最後の一人でもめて、この日はこれで終わりになってしまった。もめごとの発端は“いつも同じ顔おればかりじゃないか、もっと若いのを入れたらどうだ”というもっともな意見と、それではだれに

するかという問題であったが、翌日集まったときは委員長が納得してまゝおさまってしまった。

第2日は全体の会期もあと1日という13日に開かれ、役員候補の名簿と選出基準が示された。ここで委員会メンバー国の5か国は賛成の挙手をしなければならぬと仕込まれていたが、これも上手にできて、会長のイタリアのナポリターノ教授、首席副会長のソ連のセドフ博士以下の役員が決定したが、選出基準については規約改正の要ありとかで次回まで持ち越された。

かようにして短期間で徹底的に IAF とは何ぞやという教育をうけたが、どうもまだ良く分からないところがあり、IFA の複雑さを悟っただけである。

4. その他の催しの中から

こんな調子ですっかり忙しくなってしまったが、残りの催しの中から二三とり上げてみる。

印象に残ったのは2日目の屋に行なわれた、フォン・ブラウン博士の講演で、これはいつもガラガラの広いホールを超満員にした。当日、講演はドイツ語でされるというので、同時通訳のイヤホーンを確保して英語を聞く。前おきは“久しぶりにドイツ語で話をするので下手になっているけどよろしく”ということであった。もちろん大部分の聴衆はドイツ語を話す人達で熱心に聞き入っていた。

博士にとってはオーストリアといえば故国ドイツも同然なのであろう、それに、NASA をやめて民間会社に移ったせいもあるだろう、大変くつろいだ感じで、ハンガリーとの国境地帯バーゲンランドへの長いバス旅行にも参加して、のんびり故郷を楽しんでいるという感じがした。

会場のふんい気にあおられて日本も何かしようかと前述の二人と相談して、持参していった第2号科学衛星“でんば”の打ち上げのフィルムを見せてやろうということになって事務局にかけ合った。案外簡単にOK がでて、フィルム・イブニングに、西独、米、ソの映画と一緒に上映するという。前口上書を作ってくれといわれて、“これは日本の科学衛星計画の一部を示すものである。日本にはこのほかに NASDA という本格的な機関があって……”というようなことを書いて渡しておいた。

この催しはウィーン市民に開放されたので、子供も沢山入って日本のロケットの映画を見たはずである。まず、西ドイツの映画はマニピュレータのぱっとしなもので、ソ連のはサリュート1号の長編もの、アメリカはマリナーの映画である。どのフィルムも長く、最後が日本で時間は9時ごろになるというので、後を

土屋氏にまかせてワインを飲みに出かけてしまった。お蔭で私は罰があたってしまうのだが、わが M-4S の映画の評判は上々で、“もっと長い映画にしろ”とか“日本語でナレーションをやれ”という激励が沢山あったそうである。

ワインといえば、ウィーン市公会堂(Rathaus)で開かれたレセプションは素晴しかった。まず、荘大な建物に入って見あげるシャンデリヤだけでも、われわれ田舎者をおどろかすに十分であったが、参加者は昼間の会場の2倍近い1,500人以上だったといい、イヴニング・ドレスの御婦人方がこんなに沢山いるのを見たのも初めてだった。さて、ウィーン市長の歓迎の辞で、はじめはおごそかにはじまった式も、赤白のワインが飲み放題で大きなグラスが空になっているときがないという結構なサービスに、だんだん乱れて、くだをまき、抱き合うていたらくなり、とうとう、皆、午前様になってしまった。

5. 世界の動向と日本

以上、大ざっぱに IAF 第23回総会のあらましをのべたが、これを通じて、私は、もう一つの世界の存在に気がついた。その世界は、宇宙の海へ乗り出す人々の集まる港町のふんい気をかもし出していた。そこには、新しい船や航海用具を作る、技術者や科学者がおり、まだ見ぬ陸地に未知なものを求める探検家や博物学者の期待があり、さらに、ひと山あてようとする山師と金持がかけまわり、港の酒場は、何かいいことをさがしに来る人々にぎあう。この世界には、宇宙はすでにわれわれのものであるという自覚とゆとりがある。そして、ひざをつき合せて語る所から、国境を越えた協力関係が生まれてくるという実感があった。

ここから見た日本の宇宙の世界はユニークである。今の所、MロケットとNロケットを作って打ち上げることが宇宙活動の主たるものであり、それ以上でも以下でも相手にされず、時間のスケールと外の世界を忘れたように、事が進行しているように見え、いずれすぐにこの世界にもどらねばならない身ながら不思議な感じがした。これは別の世界を一つ形作っており、ベスト・セラー“日本人とユダヤ人”の著者、イザヤ・ベンダサン氏のいう日本教の世界の一つの典型かも知れない。

しかし世界の方は日本に無関心ではない。IAF 総会を“ソ連の次は日本でやったらどうかね”とどこかの代表からいわれた。“でもここ3,4年は予定が立っているようだから”という、“いや、日本がやる”といえ、他の国は吹っとなじやうよ”ということであったし、国連の宇宙空間利用委員会(?)のメンバ

一は、この日本代表をつかまえてこういった。“国連はいよいよ行動をおこすがそのターゲットは日本である。”と、しかしその内容は秘密であった。非力にして、私にはこういう動きにたいして、これ以上の受け答えはできなかったが、もう少し何かしなければいけないのではないかと感じることはできた。

6. あとがき

こういうわけで、IAF 総会は私にとって大変有意

義な経験となった。いろいろなことを学んだ点では、百の忠告や訓辞よりはるかに教育的でさえあった。この IAF 総会出席は、東大宇宙研の“でんば”衛星に関する打ち合わせのためフランスの CNES を訪問する途中出席させてもらったものであるが、このような機会を作って下さった、宇宙研関係者各位および日本代表になることを認めていただいた日本ロケット協会の関係者に深く感謝していることを末筆ながらつけ加えさせていただく。

(439 ページから続く)

ある時刻における衝撃波の減衰は、その波面の後に生じている境界層の各区間ごとの変動圧力を加え合わせた量として表わされる。

他方長さ 20 m, 管径 5 cm の衝撃波管で室温の空気を用いて衝撃波の減衰を測定した。計算結果を実験結果と比較すると、上の計算法はショック・マッハ数は 2.5 ぐらいまで一致することが確かめられた。

ただし本論文は、膜破裂後、境界層が管内いっぱい発達するまでの間について考察したもので、この間について適用できるものであり、衝撃波がさらにずっと進行して後の流れが十分発達した管流となった部分については考えを新にしなければならない。

5. 最適化手法を用いた回転翼機の高速度境界の推定 古茂田真幸 *Prediction of Height-Velocity Boundaries for Rotorcraft by Application of Optimization Techniques*. 208-228. 回転翼航空機の高速度線図および臨界決定点を推定するために、最適化手法を応用した一つの解析法を提案した。回転翼航空機の運動を記述する系の方程式ならびに各制限条件式を

導き、各限界点に対応した遷移飛行について、その間に生ずる高速変化を最大または最小にするような最適問題を設定する。パイロットが理想的な制御要素として動作するとしたときの最適制御入力、およびそれに伴って実現される理想的な高速度境界がこれらの最適問題の解として与えられること、および理想的入力から逸脱した誤操作の影響は最適化の過程で得られたインパルス応答関数によって近似的に推定されること、が導かれた。提案された解析法の合目的性をしらべるために、高度速度線図の高ホバ点および限界速度点からの緊急着陸、臨界決定点からの離陸中止ならびにそこからの一発不作動上昇の各飛行についての数値例を示した。特に高ホバ点からの緊急着陸については米国連邦航空局で行なった飛行試験結果と比較した検討を含めてある。これらの結果から、問題に含まれる各パラメタの影響が推定され、統一的な飛行試験計画およびデータ処理のやり方が得られることが示唆されている。

部 門 委 員 会 の 活 動 方 針 と 計 画

空力部門委員会

本部門委員会の活動については、昨年度委員会から引き継ぎ、第 4 回年会講演会“熱流体力学シンポジウム”(昭和 48 年 4 月)に参加して頂いた講師の方々のご協力によって、学会誌特集号刊行の準備をすすめている。新しい空気力学分野の展望と研究成果が紹介される予定です。

講演会などにつきましては、秋期に例年どおり第 5 回流体力学講演会を流体力学懇談会と共催する予定です。場所、日時などについて、各委員がそれぞれ検討しております。それらにつきましては、決定次第、会告に掲載するつもりでおります。また、第 5 回年会講演会(昭和 49 年)にはシンポジウムを計画する予定です。会員各位のご要望にお答えできるようなシンポ

ジウムにしたいと考えておりますので、ご意見を頂ければ幸いと存じます。

以上のほか、委員会の長期計画として風洞実験法に関する資料の収集をすすめております。昨年度委員会が国内風洞の所在調査と、その試験および実験法に関する情報を調査する目的のアンケートを作成、風洞所有機関の使用代表者各位に送付致しました。本年度に入り、その回収と調査資料の整理を行ないつつあります。調査の対象とした風洞は、測定部断面 1 m 以上(煙風洞を含む)、超音速以上の風洞では 0.2 m 以上です。これらの結果がまとまりましたら、本部門委員会のみでなく、広く有識者のご意見を参考として、その活動を拡げて行きたいと思っております。

(委員長 和田 勇, 原稿受付 48.5.17)